



「土壌物理学＋会＋事務局」と私

諸泉利嗣¹

「巻頭言」の依頼が来た。2度目である。前回は2013年3月号だったため、かれこれ10年ぶりということになる。そもそも「2回も巻頭言を書くことがあるのか？」と怪訝に思いつつ過去の学会誌を開いてみると、小規模学会の故か、それほど珍しいことではないことがわかり、ひとり苦笑いした。この度は、副会長として大した貢献もせず任期を終えようとしている。せめて巻頭言くらいはと思ひ、お引き受けした次第である。

1. 「土壌物理学」と私

“土壌物理学”を知ったのは、大学の専門過程に入ってからである。数ある授業科目の中で特に目を引きつけられたものの一つであった。その他に“農業水文学”と“地下水学”に興味があったので、これらの科目に関連する卒業研究ができる研究室に進んだ。卒業研究のタイトルは「土壌水分特性曲線に対するスケーリングとその応用」で、“土壌物理学”の一端に少し触れることができたと思う。

修士課程では地下水に関する研究をしたいと考えていたが、ちょうどその頃、科学技術庁（当時）から「降積雪対策の高度化に関する研究」のサブテーマ「不飽和帯への熱損失の定量化に関する研究」が研究室に委託されていた。委託研究の全体テーマは“地下帯水層への熱エネルギー貯留”に関するもので地下水に纏わる研究であった。しかし、実際の研究はサブテーマの基礎として土壌中の熱・水移動に関する研究を行うというものだった。地下水にこだわりたい私にとっては、それはあくまで“土壌物理学”の範疇では思ったが、「まあ、土壌物理で対象となる飽和土壌帯もマクロにとらえれば地下水だから」という指導教官の一言に、私は「なるほど！」と納得し、このテーマに取り組み始めた（諸泉, 2015）。途中から訳あって、研究の背景を“地下帯水層への熱エネルギー貯留”から“水文・水循環の素過程”に関係するものへと変更した。基本的な考え方はそれまでと同じで土壌中の熱・水移動という土壌物理学で扱われてきたテーマであったが、あくまでも水文学の分野内で研究を進めた。このようにして、土壌物理学と私の関係は始まり、今日に至る。

2. 「土壌物理学学会」と私

多くの会員は複数の学会に入っていることだろう。私の場合は修士課程入学と同時に、まず農業土木学会（現 農業農村工学会）に入り、その後の2年間で地下水学会、水文・水資源学会、American Geophysical Union と順次入会した。先程述べたように、研究自体は土壌物理学の範疇であったが、研究の背景やそれに伴う私の意識が水文学や地下水にあったため、このような入会順序になった。その当時は土壌物理学学会に入会することは念頭になかった。

月日は流れ、現在の職場に赴任した当時、私は業績が少なく、論文数を増やす必要に迫られていた。ある論文をメインとなる学会論文集に投稿したところ、リジェクトされたのである。業績を稼ごうとしていた私にとってせっかく書いた論文が「ボツ」になることは、非常に痛手であった。何とかしなければと焦っていたところ目に止まったのが土壌物理学学会発行の「土壌の物理性」であった。「論文が掲載されやすいだろう」という軽率な気持ちから、それまであまり関心のなかった土壌物理学学会に入会したのである。返す返すも無礼な話である。当初は論文が掲載されたら退会しようと考えていたが、すぐにその考えは消えた。なぜなら、学会誌や学会講演会から得られる情報はとても有益なものが多く、シンポジウムでの活発な議論は常に私に刺激を与えてくれるからだ。結果、現在でも会員である。

土壌物理学学会は、非常に基礎的ですが役に立つかどうか分からない研究も、本質を見極めしっかり評価してくれる。もちろん即効性のある研究は重要だが、そうでない研究、いわば面白い研究も大事に育てられるような広角的視野を持つ学会であって欲しい。

3. 「土壌物理学学会事務局」と私

積極的な動機を持って土壌物理学学会会員になったとは言い難い私であるが、何の因果か、今回も含めて三度事務局スタッフを務めさせて頂いている。

一度目は2003–2004年度で、赤江剛夫会長（当時 岡山大学）の下、会計幹事として参加した。当時は大学の日常業務はほどほどの量で現在ほど忙しくなく、自分のペースで仕事ができただけでもあり、何とか務められた。また、研究はなかなかすぐに成果が出ないが、事務作業は短時間で達成感を得やすいので、それなりによい気分転換にもなった。

¹ 岡山大学学術研究院環境生命科学学域

任期中の衝撃的な出来事としては、学会事務の一部を委託していた(財)日本学会事務センターの破産問題があった。未回収金が数百万円に及んだ学会もあったようだったが、本学会担当者の対応の早さが功を奏し、幸い未回収金は数万円程度に留めることができた。

二度目は2009–2010年で、井上光弘会長(当時鳥取大学)の下、編集委員長として参加した。最初に依頼が来たとき、それほど積極的な学会員でもない私がそのような大役を担ってよいのか、そもそも私にできるのかどうか迷ったが、現学会長の取出伸夫氏の「熱い説得!」もありお引き受けることにした。その時の最大のミッションは、学会誌のA4版Tex化が前事務局担当の最終号から始まっていたので、まずはそれを軌道に乗せることと、それに伴う原稿執筆要領を改訂することであった。何とか任期終了までに原稿執筆要領の改訂を終えることができたが、これを進めるに当たっては、三重大大学の渡辺晋生氏に多大なサポートをして頂いた。ただただ感謝の気持ちで一杯である。

三度目はまさしく今期で、本号が発刊されている頃には役目を終えていることになる。この度は、事務局長や各幹事のように担当の事務的な仕事がないため、過去2度の事務局担当当時に比べると私にとって負担は少ないが、その分、取出伸夫会長をはじめとする他の事務局の方々にはご迷惑をお掛けしていることだろう。この場を借りて、お詫びを申し上げたい。

小規模学会で専任の事務局員がいないため、事務局の一員になると、それなりの負担にはなるかもしれない。また、他の学会の委員の兼任や、職場の管理・運営等で忙しいことなどから、できることなら事務局の仕事は避けたいと考える会員も多いかと思う。ただ、本学会のように小規模な学会は、事務局スタッフの手弁当で運営されていることを今一度心に留めておいて欲しい。そして、事務局の依頼が来たら、余程のことがない限り断ることなく引き受けて戴きたい。また、事務局は、それまで余り面識のなかった会員と事務局会議や総会・シンポジウムの準備を通して親しくなる好機となり、思いのほか楽しいものである。是非一度は、事務局スタッフをしようではありませんか!

最後に、この巻頭言をまさに書き終えようとしている今、Rien van Genuthnten 博士の2023 Wolf Prize 受賞の知らせが飛び込んできた。Soil physics, Vadose zone Hydrology に僅かながらも携わってきた一人としてとても嬉しい。土壌物理学会の会員皆でこの喜びを分かち合えれば幸いである。

引用文献

諸泉利嗣 (2015): 編集後記. 土壌の物理性, 131: 72.